

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

かつ
喝

平成29年3月第2週放送

皆様は、「禅^{ぜん}」という言葉から何を連想されますか。

多くの方々は“坐禅の姿”を連想されるのではないのでしょうか。その坐禅の最中に居眠りをした者が、警^{きようさく}策という木の棒で「カーツ！」と言われながら叩^{たた}かれる姿をイメージされる方もいらっしゃるでしょう。

しかし実際には、静かな坐禅の最中に大声を上げることはほとんどなく、この言葉が用いられるのはむしろ“禅問答”の最中であつたようです。

特に「喝^{かつ}」という言葉が最も有名でしょう。この言葉は一般に叱咤^{しったげ}激励^{きうれい}の言葉として考えられていますが、この漢字はもともと“大声で怒鳴^{どな}ること”を意味していて、必ずしも「カーツ！」と発声することではありません。

この「喝^{かつ}」の言葉について禅の語録^{ひもと}を紐解くと、そこには四つの働きが記されています。

一つ目は、切れ味^{するど}鋭^い刀^{いっとうりょうだん}が一^た刀^た両^た断^たするように迷いや執着^たを断ち切る働き。二つ目は、うずくまったライオンがうなり声を上げて獲物^とに跳びかかるように、思い^{たけ}の丈^{ぶんさい}を粉^{たけ}砕^{ぶんさい}してしまう働き。三つ目は、漁師^{みずくさ}が水^{みずくさ}草^{みずくさ}の影^{みずくさ}に隠れている魚^{みずくさ}を探り当てるような相手の力量^{みずくさ}を探る働き。四つ目は「喝^{かつ}」の働き自体^{みずくさ}の痕^{みずくさ}跡^{みずくさ}を消し去る自在^{じざい}の働き…。

「喝^{かつ}」は、このような働きを具^{そな}え、禅^{ぜん}僧^{そう}同士^いが交^いわす活^いき活^いきとした禅問答^いの中で、究極^{ひとつもじ}の一^{ひとつもじ}文字^{ひとつもじ}によって禅の奥義^{おうぎ}を端^{たんてき}的^{たんてき}に指^{たんてき}し示^{たんてき}す言葉^{たんてき}で、同様の言葉^{たんてき}は他にもあります。

例えば、あらわになるという意味の「露^ろ」(ロー)。人^{しか}を叱^{しか}ったり注意^{うなが}を促^{うなが}したりするという意味の「唳^い」(イー)。参^{さん}究^{きゆう}を促^{さんきゆう}す意味の「参^{さん}」(サン)。通り抜けま^{かんもん}まならない関^{かんもん}門^{かんもん}を意味する「関^{かんもん}」(カン)など、相手の状況^{はっせい}に應^{はっせい}じて発^{はっせい}声^{はっせい}されます。

これらの言葉はなかなか馴染みがありませんが、僧侶^{いんどう}が唱^{いんどう}える葬儀^{いんどう}での“引^{いんどう}導^{いんどう}”^{ほうご}や、法事^{ほうご}の最初^{ほうご}に唱^{ほうご}えられる法語^{ほうご}の中で耳^{ほうご}にすることができます。

では、この一^{いと}文字^{はっ}の教^{いと}えは何^{はっ}を意^{いと}図^{はっ}して発^{はっ}せられるのでしょうか。

禅^{いしんでんしん}は、文字^{いしんでんしん}や言葉^{いしんでんしん}を離^{いしんでんしん}れ、“以^{いしんでんしん}心^{いしんでんしん}伝^{いしんでんしん}心^{いしんでんしん}”に物事^{いしんでんしん}のありのままの姿^{いしんでんしん}を直接^{いしんでんしん}伝えることを目指^{いしんでんしん}しています。

人は、悩みや苦しみを抱^{いしんでんしん}えると、言葉^{いしんでんしん}で思考^{いしんでんしん}を重ね^{いしんでんしん}てそれらを増幅^{いしんでんしん}してしまいが

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

ちです。今ここに存在しない過去への後悔や未来への不安は、私たちに絶えず付きまといま^{おも}く^る。時にその重^{おも}苦し^さから逃れようとして、人やものに依存したり、ハ^やつ^あ当たりをしたりすることもあります。

しかし、それによって今自分が本当にやらなければならない目の前のことを見失ってしまっていないでしょうか。

「カーツ！」と発せられた究極の一文字は、今自分が向き合うべき問題を、自身自身のいるこの場所に引き戻してくれます。

それは、「今・この時・この場所」から逃げ出さないようにするためです。

誰かの発してくれた一言にハッと我を取り戻し、その言葉が自分自身にとって一生の宝になることがあります。それこそまさに禅の「喝」そのものなのです。

— 終 —